

★ 講演

これからの世界と日本の子ども (一)

矢 島 鈞 次



へご講演に先立って、東京工大の学生紛争の矢おもてにたれた時のお話から、過労で急性齒槽膿ろう炎になられてお若いのに総入れ歯であること、ガラスで向うずねにけがをされ「スネに傷をもつ男」であることなど、きく者を適当に笑わせながら、あらためて学校教育を考え直すことの必要性をお話しになりました。▽

はじめに

私自身は戦争中、日本を、愛国者なるがゆえに追放されました。それは、物価統制令というのが昭和十四年に出来ました。そうしますと、北海道から東京へ来るりんごも、青森から来るりんごも、長野県、ないしは朝鮮半島から来るりんごも全部十銭ということになります。そうしますと、遠くからはりんごは来ない、ということになります。りんごなら食べなくても戦争にことかきま

せんけれども、もしこれが、戦争に必要なものが、必要な数量だけ必要な場所に集まらない、ということになりますと、日本の戦争は大変なことになる、と実は私は中央公論という雑誌に書いてしまいました。そうしましたら、発売の翌日、私の家におよびでない方が見えて、「日本列島を離れる」とおっしゃられました。そして私を昔の京城、今のソウルまで送って下さいました。列車はガラガラに空いておりましたのに釜山から京城まで、連結機の上立たされました。そういう苦い経験を考えてまいりますと、いかに人間にとって自由というものが大事かということ、つくづく感じさせられます。よしんば三度の食事が二度にへらされても、私は自由というものが大切であるし貴重である、私どもにとって捨ててはならないものが自由である、と思います。

ただし、自由というのは、何をしてもよいというのが自由では

ありません。現在では、そういう考え方が一般に行きわたっておりません。権利義務関係、こういうものを考えてまいりますと、権利の主張は無限大です。人間の権利は憲法で保証されている……あれはうそなんです。多くの憲法学者が、憲法に保証されている基本的人権ということだけをいってるんです。つまり基本的人権というのは憲法に規定されておりませけれども、第二項に、この権利は公共の福祉、公益の問題に関して権利、基本的人権の存在が位置づけられているのだ、とはっきりと書いてあります。それが忘れられている、というよりもむしろ意図的にその面を無視して基本的人権のみを主張する、そうしますと、義務の方は誰かがやってくれるであろうということでもゼロではありません。したがって権利分の義務という分数の分母は、無限大のゼロですからこの分数はゼロです。せめて私どもは、これを一にもっていききたいのです。

私、西ドイツのケルンという所に一年半滞在しておりました。それから西ドイツのいろいろな都会に、一年ほど生活をいたしました。西ドイツの国民、それから組合でもそうですが、常に主張することは、「義務の平等化」です。日本の場合は逆で、分母の方だけを強調して「権利の平等化」をいいます。これが要するに、基本的人権をもっている、われわれは何を主張してもいいの

だ、というようなはき違えから生ずる問題で、権利義務関係の中の権利の平等化だけを強く主張することになっていきます。西ドイツに「出る釘は（打たれるんじゃないくて）のばす」ということわざがあります、本当に努力して一生懸命やっていくものはそれとどんだんのばしていくのだ、というのです。ところが今、日本の教育で問題になっていきますのは、出る釘は打つ、そして怠け者のレベルに全部を平等化させる、こういう考えがあるところに、私は日本の教育が貧困になって行く過程が、出てきているのではないかとというようなことを心配しております。

外国から見た日本人

私の人生は満五十六になりますが、この半分以上が実は海外で生活しております。したがって、日本を考える場合に外から考えております。外から考える、ということがいかに必要かということを私は感じさせられるわけです。日本の問題、日本人についていろいろと日本では、日本という国はよくない、エコノミック・アニマルだ、もつとひどい言葉が使われております。これは何かといいますとバラサイト（寄生虫）という意味で、こんな言葉を心なき外国人が使っております。しかし、多くの外国人は、日本という国は何とすばらしい……こういう評価は、ヨーロッパ

でも中東でもそれからアメリカでも、日本に対する評価は大変に高いのです。ですからその意味において皆さま方は、どうか自信をもっていたきたい、そしてそこでごう慢にならずに根っこをきちんとすえて、教育というものは行われていくべきだと思えます。自信なくして教育をするということは、教育の本道にもとると思えます。自信とはごう慢をいうのではなく、「良識ある強気」、自信とは、必ずいろいろな困難に耐えていくだけの根強さ、忍耐強さ、痛みを耐える強さであって、そういうことも教育、自信の中から出てくるのだと思えます。

世界の中の日本を考える

そこで私は今日、世界の経済ないしは世界の政治、その中で日本がどういう位置におかれているか、世界の、たとえばアメリカの子どもたちの教育はどうなっているか、そして日本の教育をどういうふうに考えていったらいいか、というような問題について話したいと思えます。そしてそれに対する質問もおうけして、私も勉強したいと思っております。

新聞、日本の新聞はあまり正しい報道をしておりません。ただし、五つだけは間違いない正しいということをおし上げます。たとえば、朝日新聞、読売新聞とかいう新聞社の社名、(笑い)そ

れから七月二十四日という日付け、これも間違いありません。それから、誤植がないかぎり、昨日の株式の終値、株式の相場、これも間違いのないと思えます、四つ目は、金剛が十三勝二敗で初優勝したとか野球の結果、それからラジオとテレビの番組、この五つでございます。しかしあとのことは、最も皆さんにお知らせしなければならぬことを、新聞が書いていないような気がします。

中国

中国に関する報道は、日本の新聞は九割九分間違っております。毛沢東がまだ生きていますとか周恩来がまだ病院に入っていると、これは正しいと思えますが、そのほかの、われわれの知りたかと思っている問題についてはほとんど間違っている。たとえば、毛沢東がなくなつたあと―私はこれを脱毛とよんでいます(笑い)―誰が中国の支配者になるのか、毛沢東の奥さんの江青チヤンチンがなるのか、周恩来か、こんなことはまるっきりわかりません。なぜかという、北京のことをきかない地方の軍人、毛沢東のいうことをきかない知識人、地方の幹部、こんな人がいっぱいいるわけです。したがって、脱毛段階になったら中国は不毛になります。そして果して毛沢東の奥さんの江青があつて中国を治めるのか、周恩来が治めるのか、全くわかりません。毛沢東

の命令一下すべてのがさつと行われる、というようなことは、中国ではないのです。日本の方は、たとえば藤山愛一郎さん、または保利さんが北京に行って、中国は大変すばらしい所だといっております。私も、中国と仲よくすることは反対ではないのです。けれども、“本当の中国”を知るためには、いろいろな新聞、北京放送も聞かなければなりません。そして、人民日報を読みますと、かつての松村謙三さんとか、ああいう方は見識をもっております。ですから北京の新聞には、“松村先生”と書かれています。いずれにしても“松村先生”という尊敬の字を使っています。しかし最近の人民日報で、藤山さんとか保利さんについては“日本の藤山”と書いてあって“先生”という字が抜けています。中共ベッタリの人を中国は、決して尊敬していません。中国という国は、これから先どうなるかは、全くわからない国です。

たとえば、日中平和友好条約というものがございます。私は日中平和条約ならいいと思いますが、“友好”という字がつくと反対なのです。中国語というのは日本語と非常に似てますので、友だちとして仲よくしていくのだ、という意味にとりがちなのです。しかしたとえばこういう例があります。“必勝早稲田”と早稲田の応援団が早慶戦でかかげるのほりに書きます。そこへ中国人を案内して行きますと、中国人は全部感心します。“何と日本

の学生応援団は奥ゆかしいんだらう、相手のことをほめたたえている”といっています。これは日本語では“必ず勝つのだ、早稲田は”と読むわけです。しかし中国語は別の読み方をします。“必ず早稲田に勝つ”と読みます。ですからこれは、慶応があげるべき旗なのです。日本語と中国語は非常によく似てるのですが、実は内容は非常に違うんです。一例が“友好”という言葉は実は“同志”という意味があります。ですから“日本と中国は平和で、しかも同志なのだ”ということになります。経済体制、社会体制の違った国が友好条約を結んでいる唯一の例外は、ソ連とインドとの間の平和友好条約で、それ以外はありません。それを今、日本は結ぼうとしているのです。友好は同志を意味しますから、ある場合は軍事協力もあり得る。ここまで実は藤山さんも保利さんも、考えておられないということになります。

ですから、こういう日中平和友好条約とか、覇権の問題、こういうものを軽々しくやってはいけないということです。覇権の問題、これはどういうことか、なぜ私が反対するかと申しますと、中ソ同盟というのがまだ生きております。そして、この時の仮想敵国は日本です。日中の平和友好条約ができますと、仮想敵国は米ソなのです。ところがアメリカはここではあまり問題にならずに、ソ連がおもな仮想敵国なのです。そして印度支那半島におい

ては中国とソ連が覇権争いをやっております。これだけで、小学
校二年生の論理で、「おかしい」ということがわかるわけです。
したがって覇権問題について、覇権は反対だと中国はいう資格が
あるかという問題です。

インド支那半島

インド支那問題について、皆さまは、どういふふうを考えていら
っしゃるかわかりませんが、実は、ハノイという北ベトナムの中
心地が南ベトナム、サイゴンを陥落させたわけです。ここでご注
意いただきたいことは、一九七三年一月に、ベトナムとアメリカ
との間でパリ協定が結ばれました。それに対して今度北ベトナム
とベトナムが、ソ連と中国の援助を受けて条約違反をして、南ベ
トナムを侵略したという事実と、南ベトナムがだらしが無いとか、
アメリカ軍が引き揚げてしまったとか、いうことは、別個に切り
離して考えるべき問題だと思えます。しかししづれにしまして
も、ベトナムを解放軍、ないしは革命解放軍と呼び、南ベトナム
が解放されたといっているのは、日本の新聞だけです。日本以外
の国の新聞はベトナムと呼び、解放ではなく陥落したといってお
ります。それはともかく、この陥落に際してどういふことが行わ
れたかという、サイゴン陥落の祝賀の集会がありました。その

時に中心になったのは北ベトナムの要人で、そのまわりにベトコ
ンがいるわけです。ということは、サイゴンがハノイペースで支
配されたということです。ベトナムはわき役で、主役は北ベトナ
ム。では北ベトナムはどうなっているか、というと、内紛があり
ます。これは、まずファンバンドン派という親ソ派があり、チュ
ウ・ウォン・チン（長征）という親中国派があつて、この間で内
紛があります。チュウ・ウォン・チンという人は北ベトナム議會
の議長でつい先ごろまでハノイに軟禁されていました。そして中
国とソ連との北ベトナムにおける勢力は、大体七対三（ソ連七、
中国三）であります。それで、北京の人民開放軍で最も重要な役
割をしており、副総理である張春橋という人がおります。この人
がハノイに出かけて行つて、何とか中国ともっと緊密な関係をと
ろうと説得しましたが失敗に終わりました。すると、ハノイとい
うところは、ソ連の力が非常に強いということになります。そして
ハノイペースでサイゴンが支配されるということは、親ソ的な力
が強いということになります。その証拠に、この南ベトナムが非
同盟中立ということを宣言した時に北京は、極めて冷淡な態度を
とりました。これはなぜかと申しますと、同盟中立ということは
現状固定ということです。現状固定ということは七対三の比率の
ままで、ベトナムはソ連の勢力で治めるのだ、というふう宣言

したに等しいという考え方をもっています。

では、北ベトナムとベトナムが、ソ連と中国の援助をうけて南ベトナムを侵略したのだという時に、一体その証拠があるかという、実はソ連側がはっきり自分でいっているわけです。これは大変、日本の防衛の問題についても重要なことになっているのです。それはどういふことかといいますと、ベトナムに、カムラン湾という、東南アジアで最もいい港があります。昔、日露戦争の時にバルチック艦隊がインド洋からインド支那半島を通過して行く時に、この港に寄せてくれと当時の支配者フランスに申出たことがあります。それほどいい港です。もちろんアメリカがベトナム戦争に介入していた時に、アメリカの軍事基地であったことも間違いありません。ここを貸してくれ、使わせてほしいとソ連側がいつてきました。これをもし貸すことになる、ソ連のインド洋、東南アジア、日本を含む極東に大変な海軍力ができあがります。東にはウラジオストックがあり、西にはアンダマン諸島があります。これはインド領ですが、なぜここをソ連が使っているかといいますと、この前の印パ紛争の時に、パキスタンをアメリカが援助しました。それで、インドはソ連と結んだ、ソ連とインドの友好条約がこれです。その結果アンダマン諸島をソ連が使っているわけですが、このウラジオストックとアンダマン諸島のちょ

うど中間にカムラン湾があることになります。ソ連のインド洋やアジアにおける海軍力は非常に強くなります。これは、日本にとってもアジアの安定化にとっても、危険な要因が生まれてくるということになります。

なぜソ連がこういうことを申し出たかといいますと、今度の戦争でソ連は北ベトナムおよびベトナム対戦軍ミサイル、対空ミサイル、武器弾薬等の援助をしたではないか、その見返りとして申出ているといえます。このいい分から見ても、南ベトナム侵略について、北ベトナムとベトナムの背後からソ連が援助したということ、ソ連自身がいつていることになります。

次に、カンボジアはどうかという問題になります。カンボジアというところは、以前シアヌークが治めておりました。ところがロンノル政権に追い払われて、シアヌークは北京に行きました。そして今度はロンノルが倒れシアヌークが凱旋將軍のような形で帰って行くのが当然だと私は思います。しかし彼は依然として本拠を北京において、現在は北朝鮮におります。なぜ帰らないのか、帰らないのではなく、帰れないのです。実は、カンボジアという国は今度の戦争で、反ソ、反中共の態度をとりました。そしてクメール・ルージュという勢力が大きな勢力をもっています。しかし最近この勢力がハノイに接近してきたわけです。親ソ的に

なってきたということ。それとも一つの問題は、旧ソ連勢力というのは依然としてあるのです。したがってカンボジアでは、北京派であるシアムをどう処遇するか、今後の大きな課題だといえます。

ではラオスはどうか……、ラオスは今、大変食糧に困っています。そして中国は、右派と左派とのバランスの上になつて中立化をはかろうとしました。ところがソ連がいち早く右派を開放したわけです。そして、ソ連の左派という形に切り替えてきました。

これで、インド支那三国（ベトナム・カンボジア・ラオス）というものを、陰で操ることができるわけです。そしてこの三国をほとんどソ連の勢力によつて社会主義化の方向へ徐々に進められて行くだろうと私は思います。そうすると、インド支那半島の今後はどうなるのか、ということでは日本が重要な役割をもつことになるのです。

これは何なのか、一つの問題は、インド支那はソ連の力が非常に強い、そして中共の力もある、今度のマヤゲス号事件でおわかりのように、手を引いたとはいえアメリカの勢力も依然として強い。こういう三極構造下にあつて、お互いがチェックしあつているのだから大きな戦争にはならないだろうということがあります。しかしベトナムもラオスもカンボジアも、経済的にはピンチ

なのです。となると、アジアに日本という国があつて、これが経済力だけをもっている、軍事力はない。すると、日本がこのインド支那半島に経済協力をするということが、インド支那半島の安定化につながるのです。そしてこれは、アジアの安定化につながる、そればかりでなく、アメリカの肩代りとして日本が経済協力や援助をするとなると、日米関係もよくなつて行きます。日本の役割というのは非常に重要であるといえます。

こういうことを考えないで、インド支那半島はますます混乱を深めていく、しからばわれわれは北ベトナムを、ラオスを、カンボジアを承認する、承認しただけでは食えません。やはり、日本の経済力の手をさしのべる、これだけの気持ちがあれば、日本はだめです。アジアの本当の安定を望み、愛される国になるには、どんどん日本の経済力でインド支那半島を援助して行くことが、これから要求されてくると思います。

アジア

それからもう一つ、アジアには、フィリピン、タイ、マレーシア、インドネシア、シンガポールの五か国—アジアがあります。これらの国々が今何を考えているか。インド支那半島がああいう形でアメリカ軍が退いたがゆえに陥落した、われわれはどう

したらいいか、と大変に迷っているわけです。これらの国々がねらっているところは、一九七一年十一月のクアラルンプール宣言で、「平和と自由と中立」という考え方を出しました、中で特に重要なのは「中立」ということです。自分たちの国々を守っていくにはこれらの国は中立化地域にならなければいけないのです。

たとえばフィリピンでは、一九七二年から戒厳令がしかれています。しかし昨年は経済状態が大変よかった、したがって政治も安定化しています。フィリピンばかりでなくこれらの国々が安定化するためには、やはり日本の経済協力が必要なのです。日本という国は、自分の国のことだけを考へてはいられないだけの責任のある地位に、実はあるということ、またそれだけの能力を高く評価されているということ（個人々々の政治家の評価とは別に）なのです。

朝鮮

それからもう一つの外側から見た問題、朝鮮半島の問題を申し上げます。その前にちょっと紅衛兵のことを申します。真面目な紅衛兵ほど、中国の現実には絶望して、みんな大陸から逃げて来ているということです。台湾、ホンコン、ベトナム等、アジアの各

国で私は逃げてきた紅衛兵に話を聞きました。彼らの話によると、中国の内部事情というのは大変な状態だといえます。日本の新聞に書いてあるような、ヘエがいないとか、ゴキブリがいないとかいうことは別問題なのです。豊かな土地もあります、非常に貧しい土地もあります。正式には、年間所得一三〇ドルといわれていますが、実際は七五ドル、端境期になると一村全部が食えなくなる。するとそういう人は、公に認められてよその村へ行つて掠奪をする、という現実はずべて中国の農業政策の失敗から来ているのです。こういう実情を知らながらどうにもできない若い紅衛兵たちが逃げる、紅衛兵は今や紅兵衛、日本読みにして「アカンベー」です。（笑い）

先月私は十日ほど韓国に行つて参りました。そして板門店にも出かけ、トンネルも見て来ました。ここで、ベトナム戦争のあとには朝鮮戦争なのかという問題についてちょっと考へていただきましたと思います。

北朝鮮の金日成が、ちょうど南ベトナムが陥落した時に北京に抜けました。ところが人民日報によると、最初の歓迎ぶりとはひきかえ、共同コミュニケが出た時にきわめて冷やかなものでした。「朝鮮半島の統一については、朝鮮の民族が自ら決すべき問題だ」ということは、「中国は援助しないよ」ということです。

この理由が次のように人民日報にのっています。一つは、韓国にはベトナムのような勢力がないということ、二番目に、韓国は生存知のようにほとんどはだか山です、したがって敵もよく見えるし敵からもよく見えます。ゲリラ戦ができないということですが、またベトナムの場合は、ベトナム、ラオス、タイと横の連絡がとれます。しかし朝鮮半島は東は日本海、西は東支那海ですから横の連絡がとれません。これが三番目の理由で、四番目には、日米安保条約があります。この中に、日本の安全は韓国の安全、韓国の安全を保障することが日本の安全なのだとなります。この「韓国条項」というのが生きている、こういういろいろな理由で、中共は金日成に韓国に攻めて行くことについて、協力はしないといったわけです。ですから韓国が、いまにもベトナムの次に朝鮮半島に動乱がおこるといふように日本の新聞や週刊誌は書いていますが、そういう事実はありません。

ただ韓国では現在、三日戦争ということが盛んにいわれています。休戦ラインのところは板門店というところがあります。ここはソウルから自動車で約一時間のところですが、北側からここにトンネルを掘ってきて、見つかっただけでも十何本があります。これからもふえると思います。見付からなければ、これを使ってどんどんゲリラ戦で軍隊を送り込むわけです。ジープが十分走る

ことのできるトンネルです。そのほかいろいろのことから、三日間でおさまる三日戦争ということが韓国の常識です。この韓国の安全は、日本の問題です。そして韓国で今困っているのはお金の問題です。だから日本が経済協力をすると、韓国が自分の力をもつようになってきた北に対抗する、そして日本の左翼思想からこれを押える、という力が必要になってきます。なぜ私がこういうことをいうかといいますと、自由を守らなければならないからです。

アメリカ

こういう工合に考えてきますと、アジア諸国というのは、日本の経済協力や経済援助を期待しているわけです。そして経済が協力し合って行けば、アジアは安定化し、日本にとってもプラスになります。宮沢外相あたりも、そういう見地にたって考えておられるのだと思います。

それならばアメリカは、なぜベトナムから引きあげたのか。アメリカにはいろいろなと家庭の事情（笑い）があるわけです。昨年十一月の中間選挙の時に、今の与党である共和党ではなく、野党の民主党が圧倒的勝利を挙げました。有名な調査機関ギャラップによりますと、下院では恐らく二十名から四十名の新人が出

るだらう”というように予想しましたが、実際は七十五名の新人が当選なのです。そればかりでなく、アメリカ議会史上初の、過激派の新人が五名出たのです。そうしますと下院の議席は二九二名、その内の三分の二を野党がしめた、上院も二、三名増加の予想が五名増加しました。知事、アメリカには大きな州の知事が十名あります（ニューヨーク州、ペンシルバニア州、オハイオ州等）が、この知事がオハイオ州を除いて九つの州が民主党の知事になりました。こういうことで昨年十一月の中間選挙では、民主党が圧倒的勢力をもちました。

こうなるかどうか、といいますが、今までは行政府、ホワイト・ハウスが、これまで（ケネディ、ジョンソン、第一期ニクソン、第二期ニクソン、フォード）は外交というものを独自に行ってきた。その代表的な例がキッシンジャーです。ところが今度は、野党の立法府（議会）が非常に力を得ました。するとこの議会の動きを、行政府は無視することができなくなったのです。ですから民主党の理念がアメリカの外交に反映してくるようになってきたわけです。

では、民主党の考え方はどういうことなのかを簡単に説明いたします。これは、新しい孤立主義という考え方です。一は“脱アジア”です。アメリカとフランスというのはしょっちゅう喧嘩し

ていますが、これは家庭内の喧嘩のようなもので、殺すか殺されるかというような問題ではありません。ところが、アメリカとアジアの場合は、喧嘩したら、“革マルと反帝”というようなものと同じで、鉄パイプのなぐり合いでどちらが先に死ぬか殺されるか、生き残るかという問題なのです。そういう関係だということを考えていただきたいのです。だから民主党は“アジアから手を引け、ベトナム戦争などというのには手を出すな”そして十億ドルに及ぶところの軍事援助とか経済援助を、全部上院下院でけとばしました。これが脱アジア、新しい孤立主義という考え方なのです。

それから二番目は、国内問題と国際問題があった場合は必ず国内の方を優先する、ということです。ギャラップより以上に信びよう性のあるヤニケロビッチの調査では、一位がインフレをおさめてくれということ、これが七八%、次がウォーターゲートのような事件をおささないでくれというのが三四%、では、日本のこととはというと、ずっと下位の方で、日本と極東の問題というのが一・七%出てきます。石油及び中東の問題はもっと下で〇・八%、合わせても二・五%しかないという状態です。こういうところに、アメリカがベトナムで撤退しなければならなかった事情があるわけです。

ところがここにもう一つ、新しい国際主義というのができました。これは一つは、アメリカとソ連は核戦争をやってはいけないということ、そして緊張緩和政策を続けていくことが必要である、しかしながらソ連と仲よくするためには、ソ連に絶対勝つだけの軍事力を増強する。二つ目は、世界の中でもはやアメリカは孤立していることはできない、皆と仲よくしなければいけないが、誰とでも仲よくしていくことはやめて、同盟国を整理する、という考え方です。そしてこの同盟国の一位が南北アメリカ、たとえばカナダ、メキシコ、非常に仲の悪かったキューバ、南米の一部の国々、二位が西ヨーロッパ、第三番目に日本という順でアメリカは同盟国を整理しました。すると、新しい孤立主義と、新しい国際主義の間に、どういうように日本が位置づけられているのかというと、次のような形になります。

新しい孤立主義、これは議会であり、新しい国際主義はホワイト・ハウスということになります。この二つの共通した部分は何かといいますと、南北アメリカと仲よくしよう、それから西ヨーロッパと仲よくしようということです。しかし日本のこととなると、国際主義の方は認めても孤立主義の方は脱アジアですから認めません。日本は、ではどういう態度をとったらいかということとは非常に重要なのです。最近のアメリカは国際的影響力が少な

くなって、せちがらなくなってきました。日本にこれだけのことをしてやった、それなら日本はアメリカにどれだけのことをしてくれるのか、という計算をするようになりました。安保の傘、アメリカの核の傘の下にただ乗りをしているばかりでなく、核を積んだ船が港に入ることもいけないという、何か事がおこった場合には事前協議をやれという、いろいろうるさいことをいっている、それならアメリカは日本から手を引きますよ、といったら日本はどうしますか。軍隊がない、材料も石油も、何もありません、あるのは人間だけで、どうして自分の国が守れるでしょう。自分の国を自分の手で守れないところの国は国家と呼びません。地理的陸地というのです。これは世界の常識です。そういうことで、われわれはアメリカに何かをしてくれという時代から、われわれがアメリカに何をすることができるかということを考える時代に入ったのだと考えなければならぬと思います。そういう意味では、アメリカとのつきあい方というのも、文化交流とか教育等を通じてもっと交わって行くべき一つの大事な国なのだと考えています。

(つづく)

(東京工業大学)

(一九七五・七・二四 日本幼稚園協会夏期講習会講演より)